

前田原子力委員会委員の海外出張報告

平成18年5月23日

1. 渡航目的

ベトナム・ハノイで開催される国際原子力発電技術展示会に参加し、日本主催のセミナーで我が国の原子力政策に関する講演を行うとともに、ダラット、ホーチミンの原子力関係施設を視察し、さらにベトナム政府要人等と会談を行った。

2. 出張者及び日程

(1) 出張者 前田 肇 委員

(2) 日 程 平成18年5月15日（月）～5月20日（土）

5月15日（月）成田発 → ハノイ着

16日（火）ハノイ国際原子力展示会参加、政府要人等と会談

17日（水）日本主催セミナーでの講演、政府要人等と会談

18日（木）ハノイ発 → ダラット着

ダラット原子力研究所視察

19日（金）ダラット発 → ホーチミン着

放射線技術研究開発センター視察

ホーチミン発

20日（土）成田着

3. 結果概要

(1) ハノイ国際原子力展示会

5月16日の開会式には、日本、フランス、韓国、ロシアからの参加者、及び、ベトナム各省の副大臣クラス、共産党及び国会議員などが参加した。タン原子力委員会委員長の司会進行の下、フォン科学技術省大臣の挨拶では、ベトナムは、本年1月、2020年までに原子力発電所を新規に建設する計画を含む原子力の平和利用に関する長期戦略をカイ首相が承認したことを紹介し、今回の展示会がベトナム国内の原子力発

電に対する理解を大いに促進することを期待すると述べるとともに、参加各国に謝意を表明した。

また、展示ブースは、日本の原子力発電開発の経緯や良好な運転実績を示すパネル類、日本メーカーによる発電プラントの模型、写真などで構成され、フランス、韓国、ロシアのブースと比較して、質・量ともに充実していた。また、展示会場には、期間中トータルで約8000人の見学者が訪れ、最終日(19日)には、約200名の国会議員が視察するなど盛況であった。

(2) 日本の原子力発電セミナーにおける講演

日本の原子力発電の概要を紹介するために開催された5月17日のセミナーにおいて、前田委員は、「日本の原子力政策と国際協力」と題した講演を行い、日本のエネルギー・原子力事情及び原子力政策の概要を説明し、昨年10月に策定された原子力政策大綱においては、国際協力、特にアジアを中心とした協力の推進が重要な政策課題として位置づけられていること、ベトナムに対しても長期にわたって協力を行ってきたことを述べた。さらに、ベトナムの原子力発電導入には、原子力の平和利用、安全確保及び核不拡散に関する基礎・基盤作りが重要と認識しており、ベトナムにおけるこれらの基礎・基盤作り、技術者の教育訓練、プロジェクトの計画・建設・管理、機器資材の供給、運転支援等の幅広い分野において、日本は、総合的な協力が可能と考えており、官民一体となって協力・支援していくことを強調した。

その後、日本の原子力発電事業者、製造メーカー及び原子力安全基盤機構の参加者よりそれぞれの立場からの講演を行った。なお、タン原子力委員長の好意により、今回の講演に対する質問は展示会終了まで受付け、その回答は、ベトナム原子力委員会のHPに掲載していただけることになった。

(3) 政府要人との会談

経済産業省の片山政務官に同行して、キエム副首相(5/17, ティエン科学技術省副大臣, タン原子力委員長同席)、ハイ工業大臣(5/16, タン原子力委員長同席)、フォン科学技術省大臣(5/16, タン原子力委員長同席)と会談を行った。また、別途タン原子力委員長(5/17)との会談を行った。

これらベトナム政府要人の発言は、①日本が行ってきた原子力分野に関する協力に感謝、②今後予定している原子力発電導入のための可能性調査検討(F S)に対する日本の協力を期待、③特に、原子力発電の建設・運転・管理等に必要な人材育成、法制度の整備などに対する一層の協力を要請、などの点で共通していた。

(4) 原子力関係施設の視察

1) ダラット原子力研究所

ダラット原子力研究所を訪問し、ディエン所長から、研究所の概要説明及び研究所内施設の案内を受けた。

- ・ 1960 年建設を開始したトリガー炉をベースとするベトナム唯一の試験炉がある研究所。従事者約 190 名、うち 15 名博士, 35 名修士卒。
- ・ 試験炉: 出力 500kW, 自然循環冷却, AI-U 燃料(濃縮度 36%, 104 体)
- ・ 施設は老朽化しており、特に電気系統の故障が多いため、来年には電気系統の設備更新を行う予定。
- ・ 米-露-IAEA の三者合意に基づく濃縮ウランの低濃縮化プロジェクトが計画されており、現在所有している高濃縮度の新燃料をロシアにてブレンドダウンし、低濃縮燃料にして返還される予定。このため、2020 年までは試験炉として運転可能、との説明あり。
- ・ 所長は、同所の弱点や課題を良く認識しつつ、保全計画や教育計画に取り組んでいる。また、研究所内施設は、老朽化してはいるものの、大変丁寧に維持・管理されているという印象。

2) 放射線技術研究開発センター(ホーチミン)

放射線技術研究開発センターを訪問し、アン所長から、センターの概要説明及びセンター内施設の案内を受けた。

- ・ 2000 年に設立。従事者約 30 名, うち 2 名博士, 6 名大学卒。
- ・ 同センターでは、放射線利用に関する研究・開発を行っているほか、デンプンなどを放射線架橋した農業用保水剤の製品化, 医療用線源の製造, 医療用器具の滅菌, 冷凍魚介類, スパイス等に対する照射サービスを民間に提供。(線源: Co-60, 40 万 Ci)
- ・ 食品照射に関するベトナム国内の反応は、特別の反対はなく受け入れられている。

- ・ センター内を視察した際には、冷凍されたソフトシェルの照射作業を実施中。2005 年には、約 10,000ton の食品照射を行っており、照射施設は、3 交替制で、年間を通してほぼフル稼働状態。
- ・ 既にビジネスとしては成功の域に達しており、現在計画中の電子線照射装置も 1 / 3 は政府予算、2 / 3 は自己資金で賄うとのこと。
- ・ ベトナムでは、2009 年までに全ての研究機関を①基礎・基盤研究機関, ②政府の支援を受ける機関, ③自立運営できる機関に分別する方針が出されているため、同センターでは、自立運営できる機関を目指している。

以上